

図 22 男鹿半島（塩浜～門前）沿岸海域の海藻群落分布状況

ii) 群落構造調査

Line-1

基点（水深 0.7 m）より終点の離岸距離 200 m（水深 11.1 m）に至るまで、基質は概ね直径 10cm 程度の礫の混じる直径 50 ~ 80cm 程度の巨礫で構成されており、離岸距離 140 ~ 170 m の箇所は岩礁（頂点の水深 4.9 m）が存在していた。海藻群落は、基点から離岸距離 30 m（水深 2.0 m）ではホンダワラ類混生群落、離岸距離 30 ~ 200 m に範囲には無節石灰藻群落分布しており、この群落は更に湾奥に延びていた（図 23）。

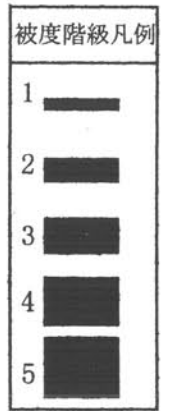
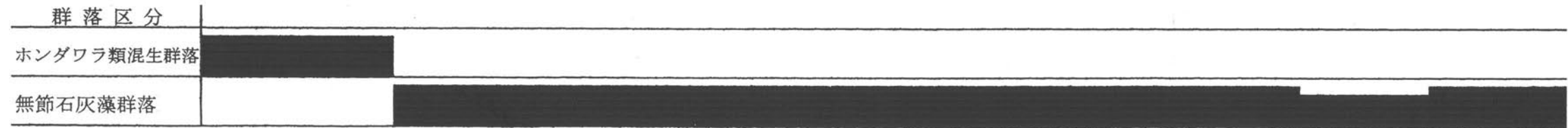
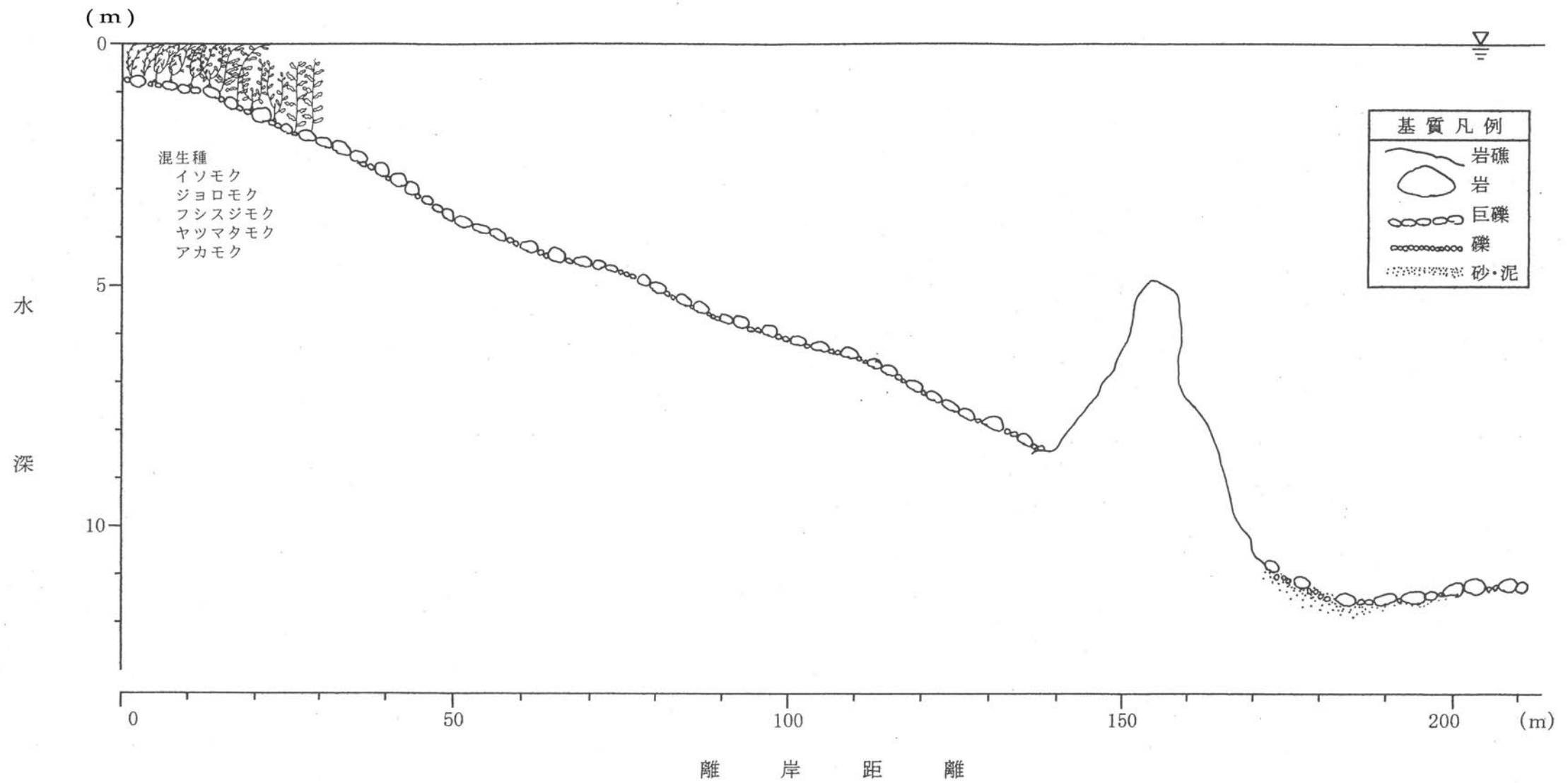
ホンダワラ類混生群落は、ジョロモク、フシスジモク、イソモク、ヤツマタモク、アカモク（ホンダワラ類全体の植被率：25 ~ 85 %）がモザイク状に混生することによって構成されており、これらの下草層としてはピリヒバ、フクリンアミジおよびヘリトリカニノテ等が、基面層には無節石灰藻が認められた。群落の藻冠部の高さは 120cm 程度であった（図 24）。

無節石灰藻群落は、殆ど無節石灰藻（植被率：70 ~ 90 %）のみで構成されており、所々に殻状紅藻類のイワノカワ科（植被率：5 % 未満 ~ 20 %）が混生している状態にあった。無節石灰藻群落内の巨礫上には、1 m²あたり 5 ~ 10 個体程度という高い密度でキタムラサキウニが生息していることが観察された（表 13）。

Line-2

基点（水深 0.5 m）より終点の離岸距離 200 m（水深 15.9 m）に至るまで、基質は概ね直径 10cm 程度の礫の混じる直径 50 ~ 80cm 程度の巨礫で構成されていた。海藻群落は、基点から離岸距離 65 m（水深 10.7 m）ではホンダワラ類混生群落が形成されていた。離岸距離 65 ~ 200 m では水深が 10 m より深くなり、詳細な観察は行なえなかったものの、透明度が比較的良好であったので水深 10 m 層の水平遊泳によって、当測線においても Line-1 と同様、無節石灰藻群落の分布していることが認められた（図 25）。

ホンダワラ類混生群落は、フシスジモク、ホンダワラ、アカモク、ノコギリモク、ヤツマタモク、ヨレモク（ホンダワラ類全体の植被率：15 ~ 80 %）がモザイク状に混生することによって構成されており、基点付近の消波ブロックではこれらのホンダワラ類に加えてツルアラメ（植被率：5 ~ 20 %）が混生していた。下草層としては、フクリンアミジ、ピリヒバ等が、基面層は無節石灰藻が認められた。群落の藻冠部の高さは 100cm 程度であった（図 26、表 14）。



調査年月日：平成12年6月4日

図 23 男鹿半島の海藻群落垂直分布状況 (Line-1)

群落区分	ホンダワラ類混生群落	水深 ; 0~2m	
階層構造	優占種名	高さ(cm)	被度(%)
I 藻冠層	アカモク	120	20
	ジョロモク	70	15
	フシスジモク	120	10
	イソモク	50	8
	ヤツマタモク	70	7
II 下草層	ビリビバ		7
	フクリンアミジ		4
	ヘリトリカニノテ		3
III 基面層	無節石灰藻		70
	イワノカワ科		2

(水深は平均水面からの値とする)

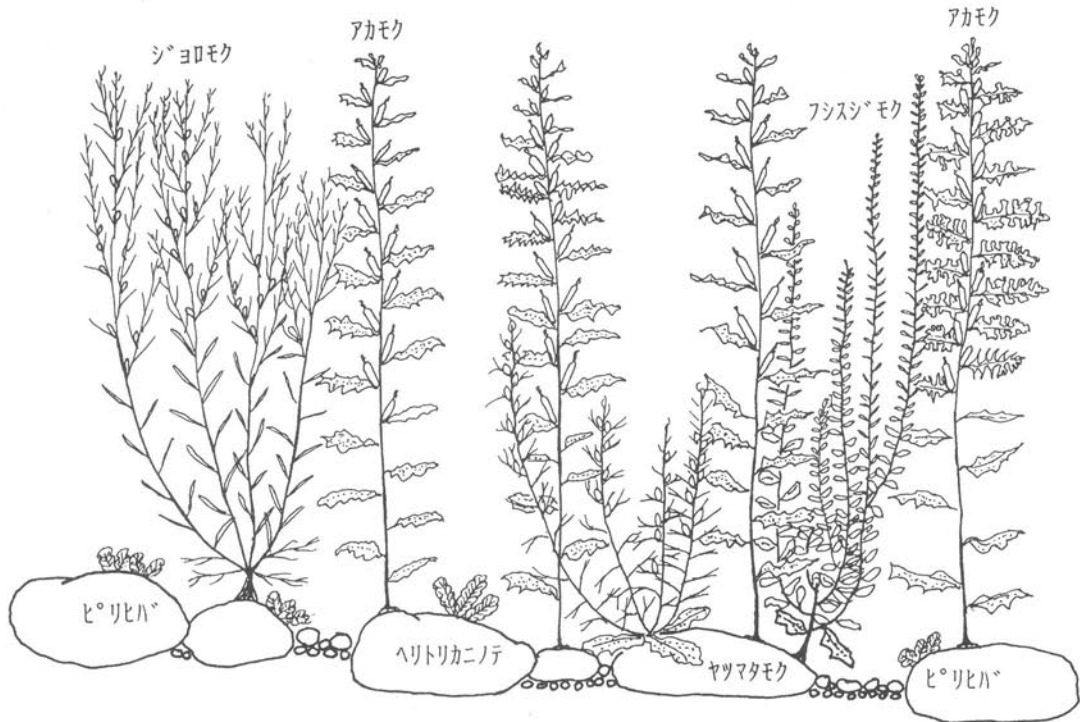


図 24 ホンダワラ類混生群落の構造様式 (Line-1)